

保守王国の

今

①

住民の活動 地域の力に

群馬は「保守王国」といわれる。現状維持や伝統を重視する風土は安定感の一方で、変革や地域の自立心を妨げてきた側面もある。何を保守し、何を变えていくべきなのか。地域の新たな動きを紹介しながら考える。

高崎市の旧吉井町地区のタマネギ畑で6月7日、9人の外国人が熱心にノートをとっていた。「ここで作るタマネギは冷蔵保存しながら、時機をみて市場に出荷している」。農業生産法人を経営する武藤真堂さんの説明を、NPO法人「自然塾寺子屋」の森榮梨子さん(35)が滑らかな英語で通訳した。

9人は、エチオピアなどアフリカ各国の農業担当首庁から派遣された研修生だ。武藤さんが「ぜひアフリカでも農産物を売りたい」と呼びかけると、「Good plan(いい案だ)」と応じた。

自然塾寺子屋は2001年、甘楽町で誕生した。発起人は、

アフリカから訪れた研修生たちに、タマネギの栽培や出荷について説明する武藤さん(右端)。森さん(右から2人目)が通訳した(6月7日、高崎市の旧吉井町地区で)



青年海外協力隊員として2年間、中米のパナマで活動した高崎出身の矢島亮一さん(52)。

パナマでは農村の地域おこしを担う「村落開発普及員」だった。帰国後、過疎や高齢化に悩む地

元でも貢献したいと、活動を始めた。

町や村の国際交流担当部署を訪ね、寺子屋の構想を説明したが、なかなか相手にされない。知人がいた縁で甘楽町に狙いを定めた。青年海外協力隊員となって発展途上国へ渡る若者や、海外からの研修生を受け入れる事業を始めた。

国際交流になじみのない一部の住民からは反発を受けた。一方で、「知らなかった人たちと触れ合える。おもしろい」と、協力者が現れ始めた。中米のホシジュラスで隊員を務めた森さんも運営に加わった。

08年には、寺子屋の研修に協力する農家などが集まり、「甘楽富岡農村大学校」を設立した。スタート時に46人だった会員や協力者は今年、80人近くに増えた。

富岡市内で先月開かれた農村大学の総会には、ゲストの自治体職員らも含めて約20人が出席。酒を酌み交わしながら、作

物の育て方や地域の活性化について語り合った。

その輪の中に、元甘楽町議の吉田恭一さん(68)の姿があった。議長も務めた「地域の顔」で、自民党の福田赳夫、中曽根康弘、小淵恵三の元首相3人がしのぎを削った中選挙区時代の衆院選を始め、数々の選挙に関わってきた。

選挙で恩を売っておけば、困りごとがあった時、政治家はより相談ののってくれる。地元の実業に予算をつけようと走り回ってくれる。「経済が右肩上がりの時代は財政も豊かで、選挙のたびに行政サービスが充実した」と振り返る。

吉田さんは今も、中曽根弘文参院議員(群馬選挙区)、小淵優子衆院議員(群馬5区)の町の後援会長に就いている。だが、昔と意識は違う。「政治家や行政に頼るだけではなく、できることは住民がやらなくてはいけない。寺子屋のような、住民の自発的な取り組みが、さらに貴重になる」とみる。

矢島さんも思いは同じだ。「地域や農業の良さを発信できる。その喜びがあるから寺子屋は続いてきたし、これからも続ける」と語った。